大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十一年九月三十日印刷納本大正十一年十月一日發行（毎月一回一日發行）眞生第一卷第九號

眞生

第一卷十月號

□或人の曰く、宗教は吾人の正に信ぜざるべからざるものなるかと。

□余の曰く然り。吾人に宗教なきは即ち生命なきなり、宗教は吾人の生命なればなり、價値の人生は宗教の人生なり、宗教は一切の人類をして永遠の生命たり價値たらしむるもの、是の外に眞の宗教はあらず。

□或人の曰く、然らばそは必ずしも宗教ならずとも可ならずや、哲學も然り、道德も然り、科學も藝術亦然らずやと。

□答て曰く、否然らず、夫等は單なる人生の一部面なり、人生生活の全面にはあらず。然に宗教は其の人生の全面中心の生命なり、故に一切の科學も哲學もあらゆる道德藝術も其の歸趣する所は宗教なり。

□宗教は萬法の統攝、又一切諸法の歸趣にして宇宙の根元人格の中心生命なり。吾人は宇宙内存の一大靈體より出でゝ再び此の靈體に歸趣すべきもの、吾人の生命も吾人の人格も皆歸向す。

□故に宗教は正に吾人の信ぜざるべからざるもの、否正に吾人の信ぜずにはあられざるものなり。（念）

目次

○不信の友へ

○信行の念佛(二)　土屋觀道

○魂の窓より　金子白夢

○懺悔錄　演阿彌

○「吾朋」便り

如來相

□俺は「俺の力」で「俺のモノ」を俺が使つてゐるのだと考へてゐる其「俺の力」を考へてご覽なさい。

□膳の上に在る澤庵の一片、身に着けてゐる肌着一枚、夜の安眠畫の活動は果して俺の力に依て贏ち得てゐるのでせうか。進で俺の肉體、俺の生命俺の財産と呼んでゐるものもよく考へて見れば悉く惠まれの塊りである、一切は借物であり、自然に集つて來てなした集積であり、一時的の焦點でないものは無いそしてそれも時々に成壞を續けつゝある。

□たゞ確かなものは一切のものを結んでは生じ、解いては遷つてゆく力のみである。集めて一物を成したとき「有る」と云ひ消えたとき「無」と云ふ、たゞ「緣」の弄ぶところである。三千の諸法、如來の海中に塵の如く浮べる丈けで、空々寂々、取りとめて「俺」とし「我れ」とするものも無い。たゞ佛のはからひで顯はれた一の結集緣生を俺と云ひ財と云ひ身と云ふ。

□我の我とするもの無きこそ「我」と云はるゝものである、一切が從如來生の事々であり、物々である。賢も愚も富も貧も猫も杓子も皆如來としての姿である。現在の我は無量の力の結果であると共に、無限の變化を應て與ふる因である、現在の一が價値に生き輝く事は應て次に來るものをして意義あらしめる事であり、現在の儘が全分の活現なると共に、より充實したる向上を念じつゝ進むところに、生きた如來の相がある。

□俺の爲めとか、いや誰の爲めとか云ふ、自己の如來相に醒めて躍進するところに眞實の生活が啓ける。(尅)

眞生

不信の友へ

○人の人格と信仰を批難して自分の敎團を造らうとする人々の多くあるといふことを聞く思ふに之ほど卑い事柄はない。

何故に人の人格をそんなに難ずるのか又何故にそんなに人の信仰を謗ずるのかかは汝は其の暇で何故に汝自身の道を求め、汝自身の人格と信仰とを以つて其人を說き其人を導く事の正しい事をせないのか。

○信仰は各人主觀の體驗である。人格は其人自身の生命である。然るを汝は何を以て輕々に其人の信仰を批難し其人の人格を謗ずるのか、汝は其事自身が己に汝自身に眞の信仰なく人格なき事を表白せる事を知らねばならぬ。哀の人よ夫では汝の人格も信仰も○ではないか。

○心せよ徒に其人の人格を謗じ其の人の信仰を難ずるは即ち人の人格を損け更らにその人の人格を殺すものなることを。人の罪、罪として之より大なる罪はない。若し汝自身に於て其人の信仰と人格とが社會を害し道に反すると思ふあらば汝は何故に其人本人に對してヒソカニ其人の反省を促しで其道を搆ないのか。而も尙夫れでも其人が之を改めずといふならば其時こそ止むなく之を世間に公表してでも更らに其人の反省を促し併せて他人の之に類せられざらん事に注意すべきである。

○然るに汝は果して此の眞實の慈愛を有せりや否や、若し然らずとせば世に之ほど卑しむべく、又哀れなる人はない。

○オ、人の人格と信仰を難ずるの人々よ、夫れでは汝自身の心がすむまいが。

信行の念佛（二）

土屋觀道

然るに眞宗の方では信心生因といつて主として信仰の中心を信の方面におき、淨土宗の方では稱名生因といつて念佛稱名の方を主張するの傾きがあり、殊に甚しきに至つては此の兩者各々其の信ずる所を主張して相爭ひ相討つて平和と向上とを主とすべき生命の宗教が反つて其の中心生命にさへ反するものがあるといふことはどうした理であらうか。若信行不二であり、信行是一のものであつたならば此の二者のの爭いはないはずではないか、此點最も吾人の注目すべき所である。

然るに宗教本來の面目は對他的のものでなくて、他の人の如何にかゝはらず自分自身が之を如何に信じ如何に之を行ずるかといふのが正當であつて、他人の信仰の如何によつて左右せらるべきものではない。故に自分の信仰と他人の信仰と同一であらうとなからうと其の人は其人の信ずるところによるものであつて他より彼此云ふべきものでもなく、又自分の信仰は自分が自分に信ぜられる所を信ずるものであつて他人より難せらるべきものでもなく又難ずべきものでもなく又難ぜられても夫によつて左右せらるべきものでもない。故に各々各自自に於て眞面目に其の信ぜらるべき已が信仰を益々確實に純淨に進めて行けばよいはずである。然るにそこには人間の未だ完全ならざる爲めそこには宗教本來の面目以外の色々の偏派心からして此の宗教の正態を害するに至るものである。而も其の原因の主なるものは單なる一種の先入主、若は相互の宗派心即ち黨派的利已的排他的の傾向などより來るものは其の最も主なる原因である。乍然さらに之以上人類思想の進歩變遷の上よりして宗教思想の發達變遷に伴ふて變化し來る關係と傳統的先入主及之に伴派ふ黨派心愛着心などが加味せられて之等の宗派爭い若は信仰爭いなどの起り來るものであつて、靜かに自己眞實の本心に立歸つて宗教本來の信仰に心を注ぐならば之等の關係は皆一時に一掃せられて永遠の平和と無限向上の生活の中に宗教眞理の面目なる研究と眞實生活の正しき宗教が現はれて來べきである。茲に於て吾人は今暫く其の宗教宗派の名目の爭いを捨てゞ其の說く所の眞理そのものをたどり、而して其の眞理そのものによつて眞實の人生々活を現在より現はして行くといふことが何よりの大切なことがある。然るに世人の多くは異名でさへあれば未だ其の宗の如何なるかも知らずして直に之を批難し攻擊し、又同じ名目でさへあれば其の眞理の內容を問はず、直に同信同行の如くに思いなすの弊あることは甚だ以つて宗教信仰の正態の向上を妨げるものであつて少くとも識者のたどるべき道ではない。

而かも今や新しき眞人の世界的要求は正に吾人の此の正眞の大道に向つて進みつゝある今日、今尙基教と佛教と相爭い、自力門と他力門と相爭い、眞宗と淨土宗と相爭ふが如きは決して我等の採るべき眞實の道ではない。さればとて宗教は各人各位のものであるからして一切自の信ずる所に任かせて人の信仰を難ずることが絕對不可であり、又自分の信仰は自分の信仰なるが故を以つて一切他人の批難攻擊を顧みるものでないと云ふのではない、夫は何故かといへば凡そ宗教の眞理並に宗教信仰の楷梯は其の人其の人の個性の關係により又各人各位の價量すべき眞理要點も確かに存ずるものではあるが之と同時に又宗教の眞理並に宗教信仰の實際は其の時代の變遷並に各人各位の人格向上の變化と共に更に幾分の變

化を來しつゝあるのみならず、又人類生活の向上的一般規範の中に於て一切の依るべき共同向上の生活の中心となるべき宗教の眞理は確かに一般的普邊的共同的統一的理想の中心をなすものがあるのであつて之等の上から見る時は確に宗教信仰の統一、宗教生活の中心歸一を以つて論究すべき宇宙の大道があるのであつて、此の眞理此の生活こそは實に我等の中心向上の普邊的生活といふ可きものであつて、此の點は如來と自分との絶對關係であり又神と私との宗教生活であつて、此の向上進歩の爲めの論難攻擊ならば之決して單なる利已的排他的相對的の爭奪戰ではないのであるから、よろしく堂々とその正義の闘い、正義の攻擊を正義の活動として大に論難すべきである。之實に人類の向上、文化の完成に忠實なる人々のどうしても止まれぬ所である。故に吾人は其の宗名の如何を問はず、先づ其の中に說かれたる眞理そのものをだとりて宇宙の實相、眞人の世界へと進展して行かねばならぬと主張するものであつて、之亦吾人が單なる同宗同派の名目によつてのみ喜ばず、又異宗異派といふ名目の異なりのみを以つて嫌いとせぬ所である。一切の宗教と一切の人類とを悉く宇宙の宗教、宇宙の一員として、否宇宙の理想、宇宙の生命が此の人類と宗教との關係に於て向上し展開して行く所の現在の事であると達觀し行かんとする所のものであつて、謂所私共の信ずる光明主義は此の意味に於て正に宇宙の理想を人類の理想として念佛の一行に開顯せんとする如來中心の一大運動なりと見るべきである。されば我等の理想する光明主義とそは實に人類創つて以來否宇宙創造の昔より常に日夜に創建せられつゝある萬有の理想向上の中心を理想とするものであつて、念佛は正に此の理想實現の根本方法であるといふ見方によるものである。故に我等は宇宙と共に生き宇宙と共に向上し又宇宙そのものの理想を理想とするものであつて、如來の大道、神の心は卽ち此の心を心とすることの外に見ることできないものである。されば一切の人類一切の宗教は卽ち此の理想に生活し向上するものにして始めて眞實の人生眞實の宗教なりといひ得べきものであつて其の名自の如何、信者の多數、教儀の繁簡などによるべきものではない。故に一切人類の生活に於て、社會も國家も、一家も個人も皆此の理想、此の生活に生きてのみ始めて眞實生存の眞義を完成するものといふべきである。而して今や人類の文化、社會向上の進展は正に此の意味に於て一大人類の轉期を來しつゝあるのであつて此の文化の大成に逆行しては如何なる人類の生活も夫は反つて自己の本心を裏切るものとなるのである。

されば今此の信行の問題殊に信心生因、稱名生因の問題に對しても此の見知よりして充分の公平無私の態度を以つて眺め來る時、そこにはいやしむべき單なる宗派心、黨派心若は先入主などよりして徒らに宗教信仰の純淨を混惑せしむるところのものと而かも亦此の中に實に文化向上の自然の順序として最も深く宗教の信仰を純淨ならしむるものとが發見せらるゝのである。いはゞ此の二者の中に人類生活の醜態と人類向上の眞劍とを見ることができのである。

されば今此の二者の信行問題に就てそこに一つの史的觀察と人間心理の狀態とを觀察して更らに自己の信行問題に其の信仰を展開し行くといふことは決して無意義な問題ではないのである。

然らば今如何にして稱名生因の問題は展開して來たのであるかといふに此の問題を詳細に考察するといふことは到底一朝一夕にしてできることではなく、少くとも宗教の本質上より之を觀察し併せて、佛教開宣の本義を研め聖淨二門の展開、教理發達の順序、宗教信仰の進展を歷史の事實に照して考察す

べきである。乍然今日の所是等のことを詳論するの暇はない。故に今は只其の信行問題の中心たる稱名生因の學說並に信仰の成立敎理の大綱よりして信行の念佛には入りたい。夫に就ては稱名生因の學說完成者少くとも念佛往生の一宗を開宣せられたといはれる法然上人の此の問題に對する見解を中心として、之に到るまでの佛敎史上の史的關係並に其の中に含まれたる敎理と信仰との關係を明かにすることが最も關要なることである。さて然らは如何にして稱名生因の問題は起つて來たか。言換へればどうしたわけで稱名するといふこと念佛するといふこと卽ち南無阿彌陀佛と申すことが生因卽ち極樂（阿彌陀國）に生れる原因となるかといふに今法然上人の見られるところによれば次の通りである。

凡そ佛敎の敎へ多しと雖も其の目的に至つては等しく一切衆生の生死解脫を得しむるに外ならぬ。乍然其の解脫の方法に至つては衆生の機根まちまちであるから、佛陀の敎へは是等の衆生に相應すべく又色々に敎かれてある。けれども之を大別すれば聖道門淨土門の二門に分つことができるのであつて、前者は戒定慧の三學を修して自から天地の大道に一致して生死流轉の苦難を脫し法性自然の如來の妙境に到らんとするの敎へであつて、後者は是等の修行困難にして到底自からの力は生死解脫のできないといふ愚人、卽ち罪惡生死の凡夫が救かるの方法であつて、之は特に我等如き衆生凡夫の爲めに建て給へる彌陀の本願に乘ずるの方法である、而して彌陀の本願に乘ずるとはどうすることであるかといへば、夫れはたゞひたすらにおすがりするこゝろにて南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と申すばかりである。さうして此の二門の中聖道門の方では戒定慧の三學を持つて始めて解脫を得るといふが始き普通の凡夫には到底でき得べくもない難行苦行であるのに、淨土門の方ではどうしてそんなに念佛申すばかりで佛國に生することができるかと云ふに、夫は前者は自力の行なるが故に機根下劣の人にはできないが後者の方では彼の佛の本願力によるが故に自分の力で解脫するのではなく彌陀の御力によつて救かるからして如何なる下劣下根の人々も往生することができる。その他三心四修などと云ふことがあるけれど夫れ等は皆決定して南無阿陀佛で往生するのだと思ふうちにこもつてゐるから、それさへ決定がてきてゐれば夫等の名目などは知る知らないとにはかゝはらぬといふことである。而て法然上人は此の信仰になられてからは自から一切自力聖道の修行を捨てゝ專心一行の念佛行者の身となつて一生を貫ぬかれた。

乍然こゝまでになりきるといふことは實に人生々活の一大問題であつて自已信念の確立は申すに及ばず一宗開宣の自覺も茲に始めて顯はれて來たのであるが而かも之等は一朝一夕にして確立したるものではなく、上人と雖も實に二十有六年の求道苦悶の結果として始めて開け來つた念佛の眞門である。而してこゝまで來る念佛敎理の展開は如何であつたであらうか。之又上人の示される所によれば自分は自分の力では此のことのよしあしは知らぬ、乍然釋尊の佛說には一切まちがいは無いと信ずる、けれども其の佛說も其の人の見る見方によつて、甲にも乙にも見られるのであつて、其の甲が眞實が眞實乙がかといへば之亦自分等の力では判らない、乍然判らないなかからも善道大師の示敎の外には凡夫解脫の方法はない、たゞ此の善導の御敎へに從へば、如何に罪深きこの判らない凡夫も彌陀の本願を信じて念佛すれば必ず十聲一聲に至るまで彌陀の佛國に往生することを得るやがて成佛することができるといふのである。法然上人は全く一切の理窟をぬきにして、ひたすらのこの善導の指南を仰ぎいさゝかも自已の意見を加へずして、そのまゝ念佛一行の身となられたのである。こゝが上人の偉大なるところであつて

此の上に若し尙色々のことをいふならば再び理智をたよりとするの宗教となつて、聖道門的理智主義に逆轉するものであつて宗教殊に念佛は凡夫のの理智のつきるところそこにこそ單直仰信の稱名一行の大悲門が展せらるゝのであつて、之最も吾人の心ずべき所である。法然上人も亦此の念佛の一點については絕大なる苦悶をせられたるの形跡がある。何となれば此の凡夫の理智のつきるところそこに眞實の念佛は顯はれるのであるが中々に此の境地開けて來ないのであつて法然上人の宗教にも此の一點が最も重大なる入信轉機の難關門をなしてゐるのである。而して理智のつきるところ必ずしも入信の轉機ではない、そはどこまでも凡夫の理智のつきると共に如來の大悲に打すがると云ふ信法の一點が開けねばならぬのであつて、單なる前者丈けなれば所謂とりつく島なき人生悲哀の絕望の冷獄のみである。されば此の凡夫の理智のつきるところさうして如來の大悲に打ちすがるところそこに始めて入信の曉光は忽然として彼岸のかなたより我が闇黑の心原に輝き初むを見るのである。而して此の一點は實に生死の分るゝ所、又人生々活の一大轉回であつて、信前信後の堺をなすところのものである。而して如何にして如來の大悲を信ずるか、如來果してゐませりや、極樂の實在如何、如何にして之を信ずるのか等、法然上人がどこまで是等の問題について御考へなされたか尙疑問とするところであるけれども如何に上人が人生解脫の中心問題として此の念佛稱名の一點に苦心せられたかは實に驚く可き證跡があるのであつて、そゝには又實に佛教史上の信行問題が横はつてゐるのである。

魂の窓より

金子白夢

土屋兄。私は心から「眞生」の發展を祝して居ります。何か書かせて頂きたいのですが、私は此の頃著作に追はれて、頗る多忙に此の暑さをも忘れて毎日執筆して居ります。從つて新たに起稿する餘裕を有つて居りませんので、甚だ失敬ですが、今秋私が出版する「體驗の歩み」のなかより左の斷片を抄錄して御約束に對する責を果したいと思ひます。どうかよろしく御願ひ致します。

□

基督の宗教は春の福音である。基督の說き給ふた天の父の御胸には、永への春が湛えて居る。春の長閑な景色、風吹き、水流れ、花散り、蝶飛ぶ、温い日の光は小高い丘の梢から氣持ちよく照つて居る。斯うしてた心の一境を辿る味ひ、そこに宗教の味ひがある。豐かな充ち滿ちた生命の流れた。人間らしい豐かさだ。基督の福音の道はそこにある。

□

『生命を賜ふものは靈なり』。此の靈の體驗がなくては宗教は不通の世界だ。人間の心が一たび神の靈の光を素直に受けて、丁度それは春の若草が朝の太陽の光を素直に受けてゐるやうに、その光に育まれて、のび〳〵と生長して行くところに宗教が芽生えるのだ。

□

我等罪人の胸に、聖い神の光が照り渡るところに春が來る。恩寵が滴つて來る。生命が匂ふて來る。聖い愛の胸に抱きしめられて、感謝の涙がはふり落つるところに魂の目覺めがある。そこに永遠の平和がある。解脫の法悅がある。救濟の讃歌がこぼれて居る。古人が『草頭の一露、湛然として萬有を涵す』と云つた心境がそこにある。斯うした感謝の涙には永劫の春がひたつて居る。不滅の靈光が香ばしくも我が心の春野を照らして居る。此處彼處、行くとして神の道ならざるはなく、見るとして神の姿ならざるはない。微妙な消息だ。眞實な辿りだ。一たび此の心境に立つ。所が世寂しからず。友懷しく、師慕はしく、見ぬ世の聖ぞ偲ばるる。『我れ神に在り、神、我に在り』。新ら

しい世界に生くるのだ。

□

宗教は説明すべきものではない。又説明され得べきものでもない。宗教は味ふべきものである。神と云ひ、佛と云ひ、如來と云ひ、神の子と云ふ。其の信、その味ひに至つては、到底論理や概念の達し得る所ではない。(さればとて決して論理や概念を無視して居るのではないが)。その妙に至つては唯だ心證するより外に道がない。文字や言葉では到底駄目だ。所詮は實感だ感得だ、體驗だ、自證だ。ここ即ち冷暖自知の境だ。唯佛與佛の境だ。世尊が『止みなん舍利弗復た說くべからず』と仰せられたのも、基督が『父外に子を識るものなし』と仰せられたのも、要するに宗教の極致は言說以上の境地だと云ふことに歸するのである。智者や達者に隱くされて、赤子に顯はれた宗教上の眞理は味ふの外に辿るべき道がない。基督の味つた宗教は基督の外に體驗し得ない。釋迦の味つた宗教は釋迦の外に識るものがない。私の味つたものは私の外に識るものがない。

□

父の心と子の心、佛の心と衆生の心とが一つに融け合つたものが宗教だ。神の心と基督の心とが溶け合つて、一つになつたところに基督の宗教がある。理性の手が達し得ない、靈と靈とが直ちに相感應する妙境だ。永遠の愛が雫いて居る。不盡の生が泉んで居る。ここに奇蹟がある。奇蹟(ウンデル)のあるところに、神が自己を語つて居る。奇蹟は宗教の花だ。信仰の寵兒だ。(決して謂ふ所の迷信ではない)。奇蹟のあるところに神は匂ふて居る。謂ふところの奇蹟とは、神の自己顯現の姿である。

□

『父は我に萬物を與へ給へり』との深い意識に覺めて基督は、萬有は我が手にありとの權威の自證に立たれた。此の喜び、此の權威、此の豐かな體得、そこに眞の『生活』が姿を現はして居る。斯うして豐かな生命を體驗的に味ふものにして、始めて宗教の世界に生き得るのだ。

□

神の聖い愛に泣くことの能きたときに、斯うした意識のさやかな經驗をしつくり抱きしめた魂のみが、本統に人らしい魂の所有者である。此の意識ほど、斯うした心證ほど、世にも尊いものはない、抱擁の感だ、融合の意識だ。無限の感謝だ。無限の恩寵だ。佛恩報謝の境だ。

□

人間の至心の要求は天地の人格を呼び覺さねば已まない。一たび此の至心の實驗を握つたものは、己が人格を透して、他の胸より神を呼び出すのである。傳道とはこれだ。實は道を傳へるのではない。道を呼び覺ますのである。生命を戀するのである。

□

『凡て疲れたるもの、又重きを負へるものは我に來れ。我、汝等を休ません』との基督の獅子吼は人間に對する人類愛の宣言だ。人を戀する心の叫びだ。宗教とは人が神を戀し、神が人を戀することだ。

□

『失ふ者は之を得る』と云ふ矛盾眞理が、何等の矛盾なく味得されたときに、宗教が自分に生きて來る。『失ふ』ことは大なる收獲である。人は宗教生活に於て、『我』を失つて『神』を得るのだ。

□

『神と共に働く』ことが生活だ。人間の使命はこの一語に盡きて居る。宗教の道は眞の勞働のうちにのみ、その生命を示現して居る。

◆注意◆

誌金不足で困つてゐますから、誌料未納の方は振替で御送付下さい。而して共俱に「眞生」を保養して下さい。(會計か、りより)

懺悔錄（抄）其八

演阿彌

あゝ私の信念の上に輝きて在ます如來樣よ。今暫く此くどくどしい物語を聞いて下さいませ。

偖てU氏は座敷で色々質問して居られますが私は唯だ今朝の事が氣になつて聞いて見樣か如何せうかと頗りに迷つて居ます。其内U上人は御歸りになりましたので極く簡單に御話して見ました。

「今一度經驗してからと思ひましたけれど余りに不思議に堪えられませんから、ツイ思ひ切つて御尋ね致しました。どうも自己眠催であらふと存じますが、こんな事も世間には隨分有り得る事でせうね。」

「イヤ。夫れは刹那三昧と云ふものです。催眠の場合には暗示の必要がありますが、あなたのそれに大暗示となる可きものがありません。嚴密に云つて假にあるとしても之は如來より示されたる物ですから通常の眠とは全然違ひます。」

と、而して大變喜んで下さいました。

心靈的方面に全然盲目である私には此樣な御答丈ては到底滿足に諒解する事が出來ません。と云つて更に反問して見る丈の何物も持合せませんので之は是非今一度經驗してから其事實に依つて考察して見るより外に仕樣がないと思込みました。

午後になりまして輕鐵に依てS市に向ひましたが車中上人は寫生の例を引いて頗に私の疑ひの雲を開かふとなすつて下さいましたが私は心の中で

「一度では判らぬ一度では判らぬ。」

と斗り云つて居りました。

其夜S市ではS寺で上人の講演會が開かれましたまだ二三人しか人が見えませんから、上人に御ねだりして本堂で御念佛をして頂きました。今朝程の樣に恍惚とした精神の狀態に行きつ戻りつして而して其處の本尊樣が色々な形に變じます。私は

「之はうまいな。

と幾度も幾度も思ひました。何と云ふ事でせう。私はいつしか邪道に這入つて仕舞ひましたのです

賽の河原の石積は出來相になると毀れ出來相になると毀れるとか聞いて居ますが、出來相になつて

「之はまいな。」

と思ふ瞬間に精神は散亂して仕舞ます。モウ如來樣と云ふ考なぞは、そつちのけで唯だ今朝の樣にと斗り藻掻いて居るのでした。

其内に追々人も集つて參りましたのでで惜しや御念佛は中止されました。上人は私の耳許で

「如何でした。」

と尋ねられました。私は冷汗を拭きながら、

「どうしても駄目です。」

私の返事の仕方に御注意下さい。何と云ふ淺ましい心であつたでせう。上人は直ちに

「有所得の念が有るからです。」

と微笑されました。

「はてな。有所得の念てどんな事なのか知ら、普通には物質的利益を要求する心の事だとはかねて聞いて居つたが今ま要求して居る處は名利には全然無關係である。にも係らず有所得と仰しやつたのは如何した事であらう。何かしら要求する心、唯だ其心丈でも駄目であると云ふ意味かしら、然し要求する心なしで何の行爲があり得るでせう？。」

私は何だか土俵際で拋り出された樣な變手古な而して一種物足り無い寂しい氣分に滿されて仕舞ました。

此夜の御話も殆んど有耶無耶で頭が丸で腑拔の樣にポカンとしてさつぱり判つた樣な判らない樣な有樣でした。でも何だか薄物に覆はれた寶玉が目付かりかけた樣な感がして嬉しい樣な心持もして居りました。

講演後の座敷での座談の時も物足りない寂しさと見付かり掛けた嬉しさとの二つの心で唯だ自分の事斗り考へつめて居りました。

此夜上人は御宿りになる事と斗り思つて居りました處十一時何分かの夜汽車で御歸京になると聞いて大變嬉しく御座いました、夫はホンの一驛丈しか御一處に居られませんけれども、總ての人の最後御供し得ると云ふ事が何の位私を力强く喜こばしたか判りませんのです。車中

「今朝程のは余りに善過ぎたから强い執着にな

つて有所得の念は中々取れますまい。有所得の念のある間は到底も目的は貫徹されません。然し毎日一生懸命にやつて御覽なさいとても駄目だと云ふ絶望の處に到つた時初めて本物になるでせうから。」

と操り返へし々々々御話して下さいました。汽車は私の降りる驛へ直に着きました。

私は御別れを告げまして勢よく故札口を出るには出ましたが、其處に直に釘付けられた樣に立止まつて汽車をずつと見送りました。

汽車の影が見えなくなると急に親に別れた樣な懷かしい感情が湧いて一遍に泣いて仕舞ました。こんな感情は初めてです、何と云つてよいでせうか、恐らく再び此の樣な經驗は來ないでせう。私は暫くしてから人通の途絶えた淋しい夜中の町を星の露に浸り乍ら歸りました。本堂の前迄參りますと急に激しい衝動が起つて本尊樣がなつかしくてなつかしくて堪えられません、涙は混々として溢れ出ます拭けども拭けども止め度がありません。此身は此處に此儘消えても最早や何の悔ありません

否な々々此身此儘泣き入つて死んで仕舞たいとさへ思ひました。

「噫々懷かしい私の本尊樣よ。噫懷かしい私の本尊樣よ。」

と何邊操り返へしました事でせう。

私は永く永く泣いて居りました。月の影は見えぬがぼんやり薄明るい空であります。

私は永く永く泣いて居りました。初夏の夜氣で着物も濕めつて居ります。ふと仰げば星が一つ東の方へと飛びました。

「噫。上人はまだ汽車の中で有らふ。おゝ善知識よ。おゝ善知識にこそは遇ひ難き中の最も難き事とか云ふに何と云ふ惠まれたる私であらふ。」

私は萬感交々起つて新しい涙は夫れから夫へと盡きませんでした。漸うにして家の中に入りましたが興奮して居りましたから中々眠むられません。それでも安らかな落着いた快よい氣持です。

翌朝は實に元氣よく起きて昨日座つた處に座つて心から本尊樣へ御禮を申述べました。而して木魚を取つて御念佛にかゝりましたが聲が出ません。

うれしくてうれしくて出ないのです。聲を出さうとすればする程歔欷して仕舞ふのです。無論涙は滂沱として泉の樣であります。昨日の私とは何だか別人の感があります。見る物聞く物皆な新しい樣な氣が致します。私の見方が變わつたのではないかと思つても見ました。無論さうなのでせう。

「噫。私は變つたのだ！。」

こう思ふと吾知らず心が躍るのでした。

今から考へて見ますとまだ求道位にもなつて居なかつたのですけれど此當時の私にはうれしくてうれしくてたまらなかつたのです。

かくて私は毎日毎日御念佛を朝に晩にする樣になりました。然し何時も例の「有所得」が出て來ては邪魔を致します。約半月程した頃又催眠の樣な而して今度は判然と精神の統一が意識された狀態が參りました。幻覺的現象は起りませんでしたけれども、此經驗に依つて益々勇氣が出て更に々々御念佛にいそしむ樣になりました。而し御耻かしい咄しですが單に精神統一の爲めに御念佛して居なのに過ぎませんでした。云はゞ御念佛で遊戯をして居つたのです私の生命に干しては事程左樣に緊張しては居りませんでした。勿論解脫は要求して居りましたけれども唯だ單に五尺の身體の中はちゞこまつた私自身しか知らなかつた其少さな私の自由と不滅とを要求して居る處の誤まつたる利己の上からであつて本當の意味に私を利せんとする菩提心なぞは夢にだに知つて居りませんでしたのです。

それでもも私は仲間が欲しくてなりませんでしたからあちこち歩るいて見ました。其内共鳴して下さる方が四五人出來ました。するとS市のA氏から

「一晩貴寺で御念佛したい」

との書面が參りましたのが初まりで時々U上人やM氏M氏A氏N氏S市のA氏而して私の母などで別時が開かれる樣になりました其内M夫人も熱心な仲間になつて下すつて當地の御念佛は段々盛になつて參りました。

吾が朋便り（六）

□横濱　内海健郎樣より

全く御別時には多少なり得る處あり斯る重大事と知りつゝいつも五塵の手に使はれ居り自分ながら相想のつきる思い實に懺悔の至りであります。未だほとぼりもある加減やら靜かな處で御念佛申す氣分であります。目下山崎さんは四萬温泉で旁ら念佛猛進のよしです。

□大阪　豐田省三樣より

今度如來樣より一人の子供をお授け下され聖意に添ふ樣なものに育てよとの仰せかと伺はれて一層自分の修養未熟の予が思はれて恐縮する次第であります。唐澤の御別時も至極好成績との御事誠に悅ばしく存ります追々秋に入りますので當地方にも御別時が始まる樣になりました。

□岐阜　片桐照子樣より

唐澤御別中心はついも御許を離れませんでした。私事子供引つれ本月初めより當地へ參り居り晨朝には湖音に和して念佛精進いたし大自然の恩寵に浴しつゝ如來の光明中感謝いたして居ります。

□村上　若林けい子樣より

寒暑日夜の分ちなく慈光御宣傳のほど有難く御禮申上ます。去る廿日の會に光德寺樣へ參りましたら來月十四五六と御來錫下さいますとの由承り大みおやの大悲も一層に思やられて今から指折り數へて御待ち申してゐます。

□岐阜　大野顯道樣より

なつかしい思出の種が時々思出されます。一同無事で刹々に深化されていく生命道を堀り拔いて居ります。けれども刺戟のない平凡な生活は時々だらけた生活を呼び起させます。

□當麻　本間榮吉樣より

唐澤の別時により私も其後は大變永き疑問から醒め光明文字通りの心身脫落の世界を得ました事を只管感謝してゐます。其後當麻山の一切經を拜見させて頂くことに願つてゐます。當麻曼多羅抄觀經などを拜見いたしまして佛門の意味深淵なる事を今更に驚いてゐます。

□鎌倉　大佛上人より

先日は訪訪よりの御親書有難く御禮申上候隨從者の內誰か推參いたさせる存意の處欠禮仕候自分も本年は多忙にて暑中遠遊も不仕候らへ共來十月初めの長安寺別時會には必ず參加仕可く今より樂み居り申候寺內一同も全く歡裡中に念佛罷在り候間御安神被下候

□伊勢　金剛寺樣より

過般唐澤山以來一層眞實生活に入るべく希念の下に念佛精進罷在候間御安神被下候尙眞生の培加運動にも心掛け居り候處愛讀者の增加は何となく喜ばしく存候。

□大坂　長圓寺樣より。

御聖居を驚かして后ち翌日から日々行道念佛と心得招き給ふ方あらば舊來の形なれど衷心は此の念佛にて美化し盡さなんと朝となく暮れとなく修養いたし居りますから御安神下さいません。近來當地の狀況は大分に寺院に於ても私共が爲めに運動せるにあらず自からと喜びを共にして眞に價値ある生涯を得んとすることに淳解を得つゝあるたとは豐田氏と共に喜び居る次第であります。

□九州　世戸口虎雄樣より

思かけ無き眞生御送附下され難有繰返し〳〵拜讀致居候學校時代の事とも思へば慚愧の至りに存じ候此後共舊に培し御交情願上候。

□伊勢　中野善英樣より

御一人で雜誌の御世話を御願いして誠に濟みませんでした大野さんも近日中上京のよし私も十日前後には歸るつもり又何とか御手傳いをさして戴きます。

□村上　青砥柳子樣より

あまり暫く御無沙汰致してゐましたので、もはや御記憶から去た事と存じて居ましたら此頃眞生毎々御送附戴きまして何とも御禮の申やうも御座いません。私も其后引續き學校の方へ出て居ります、眞生私にはほんとうに久々にて御上人樣の御心を頂ける如うな心地がして秋の夜永のこと乍らしみ〴〵と拜見いたすつもりであります。

□ハルピンにて　小橋麟瑞樣より

黃色い塵がサツト舞上ると三間先が見えなくなるハルピンの市街は撤兵の準備と俱に此先どうなることやら。跳足で淋しく歩いてるロシヤ娘よ。願くは總ての親しき友と平和の光に生きよと心からの祈りを捧げて居る。

寄贈並註料佛込芳名

□贈○拾圓原吉郎樣○五圓柏崎極樂寺樣長岡中村禪定樣

□誌料○壹圓金井助三郎樣若葉莊藏樣羽賀虎三郎樣小林六三郎樣下田ムラ子樣奧善宏樣○貳圓田中なほ子樣川野りき子樣

振替口座東京四七貳八八番眞生社
大正十一年二月二日第三種郵便物認可
大正十一年九月一日發行毎月一回一日發行
定價一部十錢　半年六十錢　一年一圓
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼發行人　土屋觀道
東京市神田區駿河臺袋町一番地
發行所　眞生社
東京市外西巢鴨町二七一二番地
印刷人　原子廣宣
東京市外西巢鴨町二七一二番地
印刷所　無我山房印刷工場

御案内

□別時念佛三昧會

□日時　十月四日より八日まで

□會場　神奈川縣三浦郡久里濱村字八幡長安寺

□導師　土屋觀道師

□申込　長安寺宛

――（會場は横須賀より二里自動車の便あり）――

『光明教壇』より　罹災者の寓居にあて會館使用中に付き講演會は此一ケ月許休止いたして居ります

『自由倶樂部』より　毎月、水、金、夜其他隨時

▲編輯部にて

□につかしくも寂しい秋が來ました

□暗い晩一人であてどもなく巣鴨街道を歩いて居りましたら汗にぬれて車をひいて來る人に出會ひました急に恥しくなつて逃げ歸りました

□見たり聞いたり立つたり座つたりの中にはいつも精進への道を教へないものはありません

□人間は自分を固く閉ぢ込めて相手の心持ちを受け納れる事を忘れいつも〳〵相手の胸の中に自分の不幸の因を見出さふと焦つて居ります

□墮地獄の宣告が本當にふさはしく業の猛火が今にも私を燒き盡さふとして居る樣に感ぜられます。生を求めて得ず死を求めて得ずそれが本當に哀れにも小さい凡ての人間の人間に還つた時の嘆きの聲ではありますまいか

□生きる事の死よりも苦しくそして尊さが深められて行きます

□先生は先月末から裏日本方面を遊化して本月末御歸京の筈です

□寒がりの兎兄が歸京早々モウ風邪ひいて臥床してゐる處へ九州の貞美さんが上京されて室はニギヤカです

□愛讀者諸兄姉の御近況をお待ちして居ります　（顯）

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十一年九月三十日印刷納本大正十一年十月一日發行（毎月一回一日發行）眞生第一卷第九號